

五浦美術文化研究所内の津波被害

茨城大学の校地である五浦美術文化研究所内にも、去る3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震に伴う津波が押し寄せ、六角堂が消失し、天心旧居の軒先まで浸水しました（図1）。

六角堂は、地震から30分後の15時20～25分頃に押し寄せた大きな津波で、木の台座板を残して建物が失われてしまいました（写真1）。16時前頃にも2回目の大きな津波が襲来しています（写真2）。

津波直後に沖に浮遊している建物や、六角堂脇の火災報知器が斜め海側に折れ曲がった様子などから、六角堂は1回目の大きな津波の引き波で建物ごと引き離されて崩壊し、破片化しながら沖へ流されていったと推定されます。六角堂への通路脇のコンクリート壁が損壊や植生の痛みの状況から、六角堂での浸水高は7.3mと測定（4月6日午後2時）されました（測定時と3月11日15:30の津波到達時の潮位はいずれも気象庁小名浜潮位基準面+40cm）。



写真1 流失直後の六角堂の台座板

六角堂は台座板を残して流失した。火災報知器の鉄支柱も海側に折れている。いずれも最大津波の引き波によるものであろう。村山 進氏撮影。

一方、天心旧居のある庭園では、北東側の海食崖から津波が遡上し、石碑「亜細亜ハーナリ」や旧居裏までの庭園全体が浸水しました。水位は天心旧居の南東側廊下直下まで達しており、庭園床からの浸水深は55cmでした。津波が遡上した、六角堂に通じる小道のやや低まりにあった200kg以上もするコンクリート製ベンチ2基は転倒し、海側に数m程度引きずられていました（写真3）。ここでの海面からの高さは10.2mであったため、天心旧居での津波の遡上高は約10.7mにも達していたこととなります。

六角堂は五浦海岸の大五浦（北側）と小五浦（南側）呼ばれる小さな入り江の間に突き出た半島状の岩礁の高台に建っています。太平洋に面した奥まった内湾地形のために、太平洋から直撃した津波は他の地域よりも到達高度が高まって、茨城県で最も高い遡上高記録の一つとなったものと考えられます。

茨城大学東日本大震災調査団 地質災害グループ 理学部 教授 安藤寿男

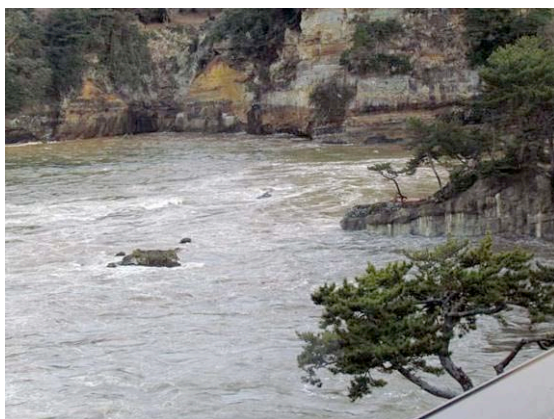


写真2 六角堂が消失した後の二回目の大津波

右中央にあるはずの六角堂がない。岩礁に碎波（白波）が起っていない。3月11日16時前頃、五浦観光ホテル大観荘より撮影。津波の高さ約5m。山下昭良氏提供。



写真3 海食崖に面した庭園の津波遡上部

右側通路を下がったところが六角堂。通路内側（右方3～4m）にあったコンクリート製ベンチが引き波で引きずられて転倒している。枯れ草は津波の堆積物。ここでの津波の浸水高は10.5mを超えると予想される。村山進氏撮影。

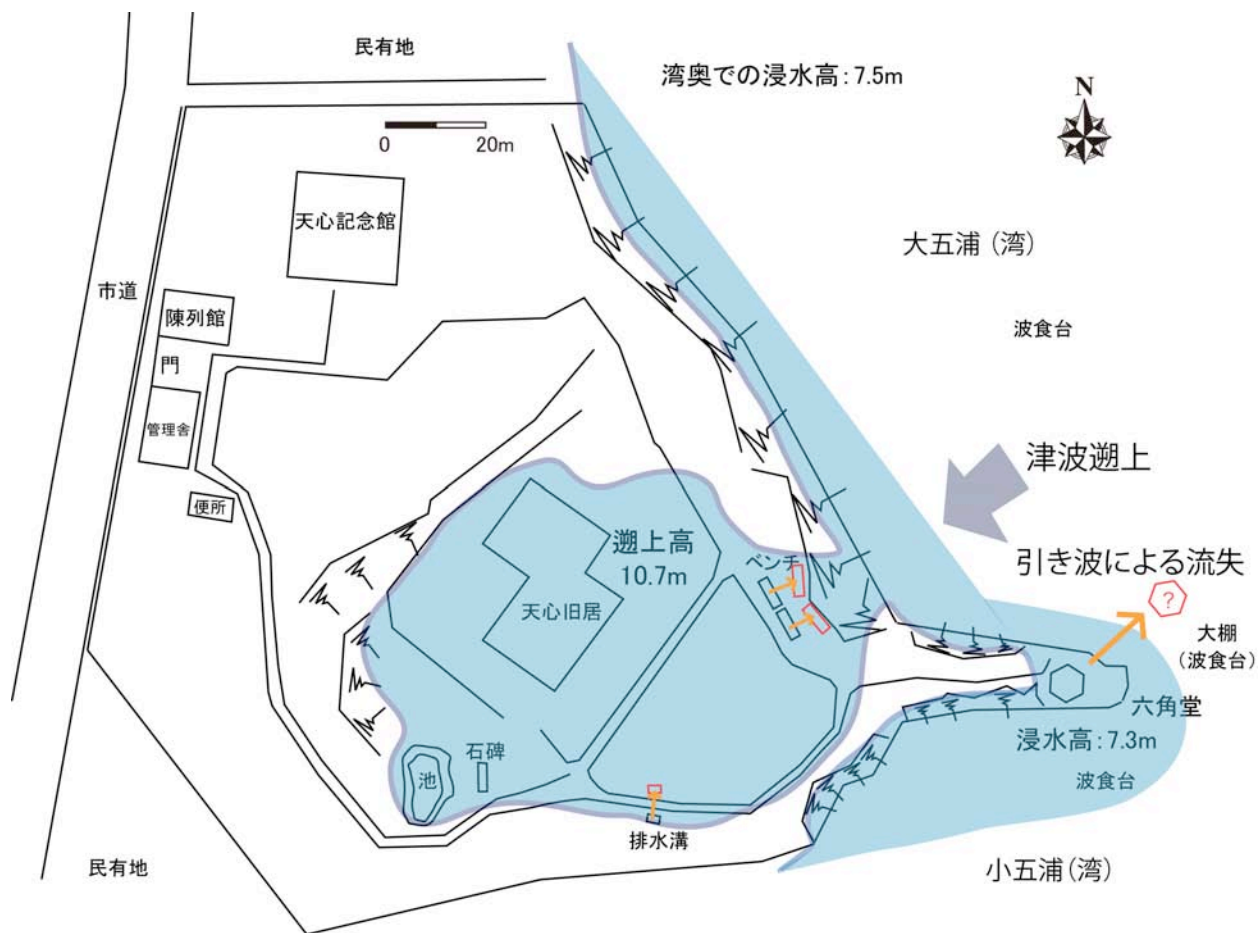


図 1 五浦美術文化研究所内での津波浸水被害模式